



明治学院大学機関リポジトリ  
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	「都会喜劇」と戦後民主主義 - 占領期 (1945-1952) の日本映画における和製ロマンチック・コメディ研究 -
Author(s)	具, 珉婀; Ku, Minah
Citation	
Issue Date	2017-10-19T05:09:39Z
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/3236">http://hdl.handle.net/10723/3236</a>
Rights	

## 具珉娥 博士学位（課程博士）審査報告

2017年5月10日

審査委員長 斉藤綾子

表記の博士学位審査請求に関し、審査委員会による論文審査と協議の結果、全員一致で合格と判定しましたので、ここにご報告いたします。

- ・請求者氏名 具珉娥
- ・論文題目 「都会喜劇」と戦後民主主義----占領期（1945-1952）の日本映画における和製ロマンチック・コメディ研究  
“Urban Comedy” and Postwar Democracy: An Examination of Japanese Romantic Comedy Films During the US Occupation Period (1945-1952)

### 審査委員会

委員長	斉藤綾子（文学部教授）	印
委員	大原まゆみ（文学部教授）	印
委員	岡本章（文学部教授）	印
委員	門間貴志（文学部准教授）	印
委員	Domenig, Roland（文学部准教授）	印
委員	平野共余子（本学非常勤講師）	印

## I 審査内容

### 1. 論文の趣旨と構成

具珉娥氏の課程博士学位申請論文「「都会喜劇」と戦後民主主義----占領期（1945-1952）の日本映画における和製ロマンチック・コメディ研究」は、A4版176頁（本文155頁）の論文である。本論文の構成及び文献一覧など、形式面は課程博士学位論文としての体裁が十分に整えられている。そこで、以下では具体的な内容面の検討に入る。

日本映画研究において、敗戦に続く占領期（1945-52年）と講和条約施行後のポスト占領期についてはさまざまな研究成果が上がっている。この分野においてパイオニア的な研究である平野共余子の『天皇と接吻：アメリカ占領下の日本映画検閲』（草思社、1998年）が示したように、占領期の映画政策は、GHQの民主主義政策の下で映画内容の積極的な検閲を行い、日本を非軍事化し民主化するために、軍国主義や財閥の戦争犯罪を追及し、また男女平等や基本的人権の擁護を謳う題材を積極的に奨励し、一般大衆に民主主義概念を啓蒙することを目的としていた。GHQの民主化政策の下で、日本が大戦を引き起こした皇国軍事国家から新たな民主主義国家として再出発する過程において、映画が果たした役割は極めて大きい。

こうした占領期映画研究に新たな視点を提供すると位置づけられる本論文は、狭義の占領軍の意向を汲んだ民主主義啓蒙映画（アイデア・ピクチャー）ではなく、プログラム・ピクチャーとして知られる長篇二本立て興行向けに作られたスター中心の量産体制から生まれた娯楽要素の強いコメディ映画をその主たる研究対象とする。同時代に批評家たちによって「都会喜劇」と言及されるようになったこれらの映画は、検閲政策や作家研究を中心にした占領期映画に関する先行研究でほとんど議論されることがなかった知られざる映画群である。都会喜劇は、占領期に奨励された映画の一つとして、「政略結婚を批判」し、「自由恋愛を謳歌」することで、自由恋愛の大切さを啓蒙しようとした「恋愛映画」の一部として考えられるが、占領期初頭に自由恋愛を象徴する接吻を称揚するアイデア・ピクチャーとして作られた接吻映画がセンセーショナルな話題を作ったものの、同時代の観客や批評家に酷評されたのとは異なり、ハリウッド映画のロマンチック・コメディに影響を受けたと思われる都会喜劇は好意的に評価された。なぜ同じ恋愛映画でも、接吻映画と都会喜劇がこのように異なる評価を受けたのはなぜかという問いを出発点として、いわゆる上から教育する目的で作られた民主主義啓蒙映画であった接吻映画とは違い、戦前に日本でも輸入されたハリウッドのロマンチック・コメディと分類された映画ジャンルにそのルーツを持つ都会喜劇は、民主主義という新しい価値観を戦前からのアメリカ文化に対する大衆的想像力の文脈との連続性を持たせ、より効果的に自由恋愛と民主主義を結びつけることが可能だったと仮説を立てる。

こうして、本論文は占領期という特殊な時代に、いわば自然発生的に批評言説の中から生まれた都会喜劇を、敗戦を一つの断絶として見なすのではなく、アメリカ映画の受容の文脈から捉えた戦前、戦中、戦後という歴史の連続性としてみる日本映画史の視座と文学理論も駆使したジャンル研究という2つの角度から、同時代の批評言説の詳細な検証と映画テキストの精緻な分析によって、占領期映画の再考を試みる。リック・アルトマンの *Film/Genre* (London: British Film Institute, 1999) が示したように映画ジャンルとして都会喜劇を捉えるということは、映画産業、同時代の社会、そして制度としての映画という関係の中で映画を再文脈化することということを意味する。本論文が注目する都会喜劇は、非歴史的で普遍的なカテゴリーとして存在す

るのではなく、むしろ既存の文学や映画ジャンルから派生した物語構造、図像的特徴、キャラクターを取り入れる形で、同時代の社会文化（この場合は敗戦と占領下における戦後民主主義というイデオロギーの啓蒙と受容の<sup>プロセス</sup>過程）に位置づけられる。本論文が検証しようとする問題は、第一に都会喜劇が特権的に描いた若い男女の恋愛は、敗戦と占領下の民主主義啓蒙にどのような役割や機能を果たしたか、である。都会喜劇と称された日本の映画群は、アメリカ文化を代表するハリウッド映画が提供するラブロマンスのファンタジーをどのように料理したかを丁寧に読み解いていくことで、本論文は占領下での映画人や映画評論家、そして何よりも映画の観客たちの欲望や不安、期待や逡巡を映画言説と映画テキストに見ていこうとする。さらには、占領期が進んでいくに従って、ユートピア的に描かれた民主主義イデオロギーがどのように変化していく過程も、映画分析を通じて詳細に検討される。

このように本論文は、日本の占領期（1945-52年）に主に撮影所で製作された都会喜劇と称された和製ロマンチック・コメディがどのように占領下の民主主義イデオロギーの啓蒙と受容に関わったかを、同時代の言説分析、映画ジャンル論から見た物語構造・図像的特徴・人物造形の分析、そして、具体的な映画テキスト分析を通じて、戦後日本映画における占領期研究に新たな視点の導入と再考を試みる労作である。

本論文の構成は、以下の目次の通りである。

## 第一章 序章

- 第一節 占領期と「都会喜劇」
- 第二節 占領下の映画界
- 第三節 ジャンルの歴史性
- 第四節 論文の構成

## 第二章 「都会喜劇」の誕生

- 第一節 占領期の批評言説にあらわれた「都会喜劇」
- 第二節 「都会喜劇」の原型：アメリカのロマンチック・コメディ
- 第三節 『お嬢さん乾杯』をめぐる交錯する思惑

## 第三章 ジャンルとしての「都会喜劇」

- 第一節 「都会喜劇」の物語構造
- 第二節 「都会喜劇」の舞台：都会
- 第三節 ロマンスの復活と「都会喜劇風の女」

## 第四章 社会統合のユートピア

- 第一節 偽装に隠された真実を求めて 『東京のヒロイン』
- 第二節 民主主義国を牽引する青年の肖像 『天使も夢を見る』

第三節	戦争の亡霊からの脱却 『情熱の人魚』
第五章 欲望と不安の交錯	
第一節	ユートピアからの脱出 『自由学校』
第二節	幻影を破る男 『結婚行進曲』
第六章 終章	
フィルムグラフィ	
参考文献	
謝辞	

## 2. 本論文の概要

本論文の趣旨はすでに前項で述べたので、本項では、各章の概要を記述することで論文を概観する。

第一章では、占領期の日本映画とジャンルに関する先行研究を概略し、本論文の立ち位置を明らかにする。都会喜劇と称された映画群を一つのジャンルとして捉えることは可能かという問題提起がなされ、論文全体の趣旨が明らかにされる。第二章では都会喜劇をジャンルとして論じることの妥当性を複合的に検討する。当時の映画雑誌や新聞を中心に、都会喜劇という言葉が、当時、さまざまな立場で映画に関わっていた人々に、ある共通のイメージを思い浮かべる暗黙の約束事として認識されていたことを確認するために、まず当時の雑誌と新聞を資料に都会喜劇がどのような映画を指していたかを浮かび上がらせ、それらの映画に共通して見られる特徴があるかを検討する。特に、占領期の都会喜劇を批評する言説の中で、1930年代のエルンスト・ルビッチやジョージ・キューカーを代表とするソフィスティケイテッド・コメディとして知られたハリウwoodsのロマンチック・コメディ映画に関する言説が重要な位置を占めることに留意し、それがどのように占領期の日本の映画言説において移植され、和製ロマンチック・コメディとしての都会喜劇として宣伝されたかを映画のプレスや広告を確認する。最後に木下恵介監督の『お嬢さん乾杯』（1949年）に関する2つの批評を中心に、近代化に対する相反する欲望を仲介しながら構築されたダイナミックなアイデンティティとして都会喜劇に刻み込まれた歴史的経験を考察する。ここでは、敗戦と占領という特定の歴史社会状況の中で都会喜劇が誕生し、その両義性がジャンルの特徴ともなることが検証される。

第三章では、実際に都会喜劇に分類される映画に反復して見られる特徴を、物語構造、物語の舞台である都会、恋愛という題材、女主人公という4つの要素をジャンルの慣習に位置づけ、各々の要素を詳細に分析する。物語構造では、都会喜劇は旧世代から若い世代への権力譲渡が核心である様式を用いることで、葛藤と混乱を克服して新しい世界を迎えるという願望を象徴

的に実現する物語を作り上げたことが示される。次に、都会喜劇の舞台となる「都会」は、戦前から日本の近代化による発展と矛盾を映し出す歴史的舞台として映画にしばしば導入され、都会映画という言葉まで生み出していたことを再確認しつつ、それが破壊された占領期になり、大衆が新しい国家の再建を目で確かめられる図像として再び浮上することに注目する。このように戦後復興に現実性を与える都会という空間を背景にした若い男女の恋の物語を描いた都会喜劇は、都会という空間をより魅力的に見せ、大衆的想像力に訴えるファンタジーとして提供することが可能だったことが検証される。さらに、都会喜劇には、男女平等、男女同権に基づいた恋愛関係を目指す存在として、自主的で独立的な女主人公（都会喜劇風の女）が登場するが、彼女はジャンルのアイコン的なキャラクターである。こうした各要素がいかんして民主主義という思想を具現化し、また実際に映画テキストでいかに扱われているかを確認する作業を並行することで、都会喜劇が生み出すイメージが大衆的想像力をいかに刺激したかを明らかにする。

第四章では、前章で確認した都会喜劇のジャンルの特徴を具体的に作品分析によって確認する。とりわけ、都会喜劇が文学研究者のノースロップ・フライが『批評の解剖』で明らかにした喜劇の下位カテゴリーである「新喜劇」の物語構造をとっていることを確認しながら、『東京のヒロイン』（島耕二、1950年）、『天使も夢を見る』（川島雄三、1951年）、『情熱の人魚』（田口哲、1948年）を中心に詳細なテキスト分析を行う。新喜劇の特徴として世代の交代という主題が挙げられるが、都会喜劇でも女主人公の父親が男主人公に娘を依託する行為は、旧世代から若い世代への権力譲渡を果たす象徴的な意味を持つ。映画分析を通じて、世代間の葛藤と社会的分裂の全てを克服し、民主的思想を内面化したと想像されるイメージが、大衆のユートピア的想像をいかに掻き立てているかが明らかにされる。

第五章では、都会喜劇に属する例外的な作品である『自由学校』（渋谷実、1951年／吉村公三郎、1951年）と『結婚行進曲』（市川崑、1951年）を分析の対象として取り上げる。占領も後期になってくると、初期の頃のユートピア的な恋愛観に基づき、権力譲渡を中心にした依託の物語とは異なり、すでに結婚した夫婦が主人公として登場し、二人の葛藤と和解、再出発を中心に物語が進行する。特にこの二作では、まるでジェンダーが逆転したかに見える未婚の男女がそこに加わり、大騒ぎを巻き起こす。こうした力関係の中から見えてくるのは、変化しつつあるジェンダー機序と構造の変化であり、その変化に対する欲望と、それを忌避し、文化の境界線を守りたいという欲望とが映画のなかでいかに交錯しているかである。もう一方で、占領が終わりに近づくにつれ、戦後的、民主主義的なものとされたあらゆる要素が組み合わさって生まれた集合体である都会喜劇にも、時代の変化に伴う価値観、認識の変化が現れ、アメリカが推し進めた民主化の矛盾や、社会が秩序を取り戻しつつある中で、占領政策に対する懐疑が浮上し始めた占領期後半の認識の変化に対応して、同時代の人々が抱いていたはずの混乱と混

沌に焦点を当て、民主主義によって仮構されたユートピアに冷めた視線が見えて来たことも指摘される。

終章では、前章までの議論を確認した上で、ポスト占領期に都会喜劇というジャンルとしてどのような経緯を辿ったのかが簡単に確認され、日本映画史におけるより広い文脈での都会喜劇というジャンルの持つ可能性が言及されて論文は閉じる。

### 3. 論文の評価

#### A. 本論文の目的とその到達点

本論文の問題提起となった、占領期における都会喜劇と呼ばれた映画群を映画ジャンルとして見ることによって、どのような機能や意味を持っていたかが確認され、和製ロマンチック・コメディとしての都会喜劇がいかに戦後日本において、いわば強制されたアメリカからの民主主義が物語を通じて、具体的な未来イメージとして人々に新たな社会的主体としての意識形成に寄与したかが、詳細な言説分析と映画分析によって明らかになった。ここでは、映画ジャンルの先行研究を参照しながら、占領期映画に関する先行研究では奇妙に抜け落ちてしまった観のある都会喜劇と称された和製ロマンチック・コメディが、一方で文学理論を援用して新喜劇という物語構造に深く関わることを示しながら、もう一方で敗戦と占領という特定の社会や歴史と深く構造的に関わっているかを記述するという困難な課題に挑戦している。そして、それは概ね成功したと評価できる。

都会喜劇という今までほとんど注目されることのなかった言説と映画群を資料から発見し、詳細な言説分析とまとまった映画分析を行ったのは具氏が初めてであり、まずその点で、研究の独自性と意義は高いと評価される。第二に、同時代の文献資料の調査が徹底している点で一次資料を整理、提供していることも評価の対象になる。さらに、広範囲での占領期における文献資料の調査が行われており、映画研究のみならず、戦後史研究が盛んに行われている文学や社会学、歴史学などにも貢献できる文献資料の豊富さも指摘しておくべきであろう。特に、歴史学や社会学からの占領期研究において近代化とアメリカナイゼーションは重要なテーマの一つであるが、映画研究において特権化されてきたジャンルは圧倒的にメロドラマであり、それは今まで 20 世紀初頭からの大きな文脈における近代化の問題として捉えられ、議論されてきた。本論文が注目したハリウッド映画のロマンチック・コメディというジャンルは、アメリカ映画のジャンル研究では中核に位置するにもかかわらず、日本映画研究ではあまり研究対象となることはなかった。本論文が丁寧に辿った同時代の言説からも明確になったように、都会喜劇という用語は、確実に日本における 1930 年代に受容したハリウッドのスクリーンボール・コメディを始めとするロマンチック・コメディとの関連と連続性を持っており、その連続性を占領期

という歴史的文脈で結びつけたのは具氏の卓見であり、メロドラマ中心だった占領期の先行映画研究に本論文が新たな一石を投じた点も評価に値する。また、ロマンチック・コメディという映画それ自体は戦前から日本に流入したアメリカ映画に由来するものの、日本の評論家たちが、民主化とアメリカナイゼーションという歴史的変動が進行する占領期において、アメリカ映画を振り返る過程で都会喜劇をいわば再発見しただけでなく、このような映画群が当時の人々が抱いていた欲望と不安に共鳴し、仲介しながら生まれたジャンルであるという点に具氏が注目したことも特筆に値する。ここにおいて、先行研究において特権的な占領期映画モデルであった敗戦や占領のトラウマとメロドラマという関係性に、もう一つの視座である民主化の幻想とファンタジーが加わったことは、今後の占領期映画研究に多くの示唆を与えることは間違いない。

この他にも本論文の評価すべき点はいくつかあるが、まず具氏が日本語を母国語としないにもかかわらず、議論が明瞭な文章で展開され、構成などもわかりやすく全体的に記述が優れていること、そして映画芸術学の博士論文として最も重要な映画分析が具体的でかつ精緻であり、文献資料の調査に裏打ちされた考察がテキスト分析として活かされている点も挙げられる。

全体として、極めて高い学術的水準に達している優秀な論文であり、今後のさらなる研究にも貢献が期待される。

## B. 本論文の課題

もっとも、本論文は全体として非常に高い評価ができるものの、今後の書籍化などの可能性を鑑みれば、課題がないわけではない。まず、都会喜劇といわゆる狭義の民主主義啓蒙映画（アイデア・ピクチャー）との関係があまり明確に論じられておらず、この点は先行研究が今まで議論してきた知見をさらに本論文の議論に有機的に取り入れるためにも、より正確な関係図が描かれるべきであろう。また、都会喜劇がジェンダーの問題に深く関わっていることが詳細な映画分析によって明らかにされたが、ほぼジャンル論における物語構造という枠組みの中で議論が限定し、残念ながらこの重要な点について考察が深くなされていない。とりわけ、5章で取り扱った占領後期の映画群で言及された男性主体の不安や抵抗といった要素は、物語構造の背後にある政治的無意識により密接に関わっていると想定され、ジェンダー論的な視座を導入すれば、より発展的で重層的な考察が可能になると思われる。同様に、近代化の問題、とりわけ1930年代のハリウッド映画を受容したヴァナキュラー・モダニズム（ミリアム・ハンセン）との関係についての議論は若干中途半端な指摘に留まっており、この議論の精緻化も望まれる。さらに、占領期に形成された都会喜劇というジャンルが日本映画史全体の中でどのような位置づけがされ、ポスト占領期以降、どのような展開になっていったのか、という映画史全体から



の俯瞰的な考察も今後の課題として求められる。だが、これらの課題はいずれもかなり大きな理論的問題を含んでおり、一つの博士論文の射程を超える作業を必要とする。その意味でも、この博士論文を出発点として、今後の研究の発展を期待したい。

## II 審査結果

### 1. 口述試験結果

2016年9月29日に提出された本論文の審査にあたり6名からなる審査委員会が組織され、2017年3月1日、審査委員会において、具珉珂氏の博士学位請求論文に基づく口述試験が実施された。

口述試験においては、本人の論文趣旨説明に続き、質疑応答がなされ、若干の文章表現上の問題に加え、前項Bで記した課題も指摘されたが、これらの課題はあくまで発展的なものとして言及されたものであり、博士論文としての本論文のレベルを減ずるものではないことが確認された。口述試験後、審査委員会による合否審査が行われ、当審査委員会として、本論文の研究テーマのオリジナル性、全体的な分析の緻密さ、歴史的資料文献の充実、それに基づく精緻なテキスト分析と議論の射程の広さは秀逸であり、課程博士学位論文として十分なレベルに達しており、博士号を授与するに値するものと評価できるとの結論に達し、全員一致で合格と判定された。

以上